



イケン先生の『恐縮ですが…一言コラム』

第 519 回 桂枝雀とモーツァルト・マジック(?)

2013.4.7

極度の鬱病から自宅で首つり自殺を図り、意識は回復することなく、1カ月ほど過ぎた4月19日、59歳で亡くなった「二代目桂枝雀」。絶頂期から円熟期へと、誰もが期待していた突然の死に驚いたものだ。彼がいなくなってから、この4月で14年目を数える。

古典落語を踏襲しながらも、超人的努力と天才的センスにより、客を大爆笑の渦の中に引き込ませる彼のユニークな高座は、ある意味、誰も継げるものではなかったと思う。

六代桂文枝(前 桂三枝)は、「枝雀のように古典落語を現代的に面白おかしく伝えることが出来る芸人は、これから先にはもう出てこられないだろう」と語る(上方では、単に「六代目」と言えば専ら六代目笑福亭松鶴を指すため「六代桂文枝」としている)。4歳上の枝雀の高座を見て、若き三枝は「この人には敵わない」…桂三枝が古典落語を目指さなかった理由の一つがここにある。

誇張した動作や表情、すかし声や巻き舌の活用、不思議な抑揚をつけたしゃべり、多彩なテクニクでひきつけ、キャラクターが躍動する…、枝雀の噺は一言で言えば「落語のマンガ化」だと思う。愛すべき登場人物たちがそのままのり移ったような高座は、古典落語が受け継いできた人間の「情」をわかりやすく示してくれた。伝統を踏まえ、更に伝統を超え、大衆芸の新鮮な息吹を吹き込んだ独自の落語は、亡き後も落語ファンの裾野を広げ続けている。

枝雀自身の言葉に「肉づきの面」というのがある。彼の本性は、とても暗い性格だそうだ。

明るくおもしろい自分を、いかに演じ続けるか、つまり、桂枝雀でいる限り、「肉づきの面」という仮面をかぶっていた。そして、前田 達(まえだ とおる=本名)とは違う自分を演じ続けていくうちに、面がとれなくなり、自分の顔について、はがれなくなった。

確か枝雀自身が、こんな「仮面の告白」をしたこと、今、思い出した。

でも、芸人であり、役者であるならば、誰もが仮面をかぶっている。「地のまま」という天才は、むしろマレである。芸人に徹すればよかったのに、真面目過ぎたのかも知れない。枝雀はよく高座で「落語は緊張と緩和」と云いつつ、実生活では自身の「緩和」ができなかったようだ。

枝雀の噺はまるでWAモーツァルトのマイナーメロディのようだ！あの明るい軽快な旋律の中で、つい、本質を誤解してしまう「モーツァルト・マジック」。小生勝手にそう呼んでいるトリックに、短い生涯だったモーツァルトは、むしろこのマジックを楽しんでいるようだった。現実から遊離し、そこには理想や夢や感動がある世界を創造する、虚構ともユートピアともいい、あるいは芸術と言い換えることもできる。この世界をいくつも、いかにも大きく作り続けることが「芸術家」であり「作家」の使命なのだろう。だから実際のモーツァルトがどうだったということと、彼の残した作品の価値は全く違って良い。この違和感を、モーツァルトは妙薬の如く楽しんでいた。

「やめや、もうネタ尽きたで」と開き直れなかった二代目枝雀、モーツァルトの秘めたる妙薬は、彼にとって、いつしか圧倒的苦悩に固まっていった。正直過ぎた爆笑王の末路であった。